

ゴート語聖書における分詞の用法

——ギリシャ語原典との比較——

志 田 章

1. 序

ゴート語では分詞 (Paritizip) がかなり頻繁に用いられている。これらの分詞の用法は、副詞的な用法と形容詞的な用法の二つに大きく分けることができる。『ゴート語聖書』は新訳聖書のギリシャ語を忠実に写した奴隸訳と一般に言われているが、この分詞の用法に関してはそうではなく、所々でゴート語はギリシャ語原典とは違った形で翻訳している。これらがゴート語独自の文法に従ったものかどうかはまったく明らかではないが、以下でゴート語をギリシャ語原典¹と比較しつつ、主に『マタイ福音書』から例を挙げながら、分詞の用法を幾つかに纏めてみたい。

2. 副詞的用法

ゴート語の分詞には現代ドイツ語と同じように現在分詞 (das 1. Partizip) と過去分詞 (das 2. Partizip) がある。現在分詞は不定詞語幹に -ands または -ônds を添加して作られる。例えば niman, nimands; nasjan, nasjands; salbôn, salbônds 等である。過去分詞は、強変化動詞が第 4 系列の語幹に接尾辞 -ans を添加して作られ (niman, numans; giban, gibans)、弱変化動詞は過去語幹に -ps を添加して作られる。現代ドイツ語のような接頭辞 ga- は添加されない。現在分詞は弱変化形容詞として変化し、過去分詞は a/ô 型変化形容詞として強弱両様の変化をする²。

さて副詞的用法の分詞は単独で使われている場合と他の修飾語句を伴っている場合とがある。また、独立分詞構文として使われている場合もある。まず単独で使われている例から見てみよう。

- 1) ip þu *fastands* salbo haubip þein jah ludja þeina þwah,
(Mat. 6, 17)
οὐ δὲ νηστεύων ἀλειψαί σου τὴν κεφαλὴν καὶ τὸ πρόσωπόν σου νέψαι,
しかしあなたが断食をするときは、頭に香油を塗り、顔を洗いなさい。
- 2) ip hvas izwara *maurnands* mag anaaukan ana wahstu seinana
aleina aina? (Mat. 6, 27)
τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν δύναται προσθεῖναι ἐπὶ τὴν ἡλικίαν αὐτοῦ
πῆχυν ἓνα;
あなたがたの誰が、思い煩うことによって、身長に1エレ付け加える
ことができようか。
- 3) jah bipe *atgaggands* atbair þo giba þeina. (Mat. 5, 24)
καὶ τότε ἔλθῶν πρόσφερε τὸ δῶρόν σου.
そしてそれから戻ってきて、あなたの供え物を捧げなさい。
- 4) Aþþan *gaggaiþ*, ganimiþ hva sijai: armahairtiþa wiljau jah
ni hunsl; (Mat. 9, 13)
πορευθέντες δὲ μάθετε τί ἐστίν, Ἐλεος θέλω καὶ οὐ θυσίαν³
しかし行って、次のことに何かがあるのか学びなさい：私は施しを望
み生贄を望まない、ということに。

これら4例では命令形の前で分詞が使われている。例文1ではゴート語・ギリシャ語共に現在分詞が使われ、この分詞は時間を示す副詞的用法と考えられる。この箇所はウルガータ (Vulgata) では接続詞 cum (wenn) による副文で表わされている：tu cum ieiunas (wenn du fastest) (千種真一、80ページ)。例文2も両言語ともに現在分詞であり、その用法は理由を表す副詞的用法と考えられる。例文3のゴート語の現在分詞 atgaggands はギリシャ語原典のアオリスト分詞 ἔλθῶν を訳して、接続詞 und を使って書き換えることができる、いわゆる付帯状況を表している。文体的なことであるが、新訳聖書のギリシャ語では、『マタイによる福音書』に限るなら、主語が同一である動詞が続く場合その中で最も重点の置かれる動詞を定動詞にして、残りをこの定動詞に従属する分詞にする

という傾向がある。ゴート語がギリシャ語原典を忠実に逐語訳している次の文がその例である：jah bitauh Iesus baurgs allos jah haimos *laisjands* in gaqumpim ize, jah *merjands* aiwaggeljon þiudangardjos jah *hailjands* allos sauhtins jah alla unhailja. (Mat. 9, 35)

Καὶ περιῆγεν ὁ Ἰησοῦς τὰς πόλεις πάσας καὶ τὰς κώμας, διδάσκων ἐν ταῖς συναγωγαῖς αὐτῶν καὶ κηρύσσων τὸ εὐαγγέλιον τῆς βασιλείας καὶ θεραπεύων πᾶσαν νόσον καὶ πᾶσαν μαλακίαν.

(そしてイエスはあらゆる町と村を回り、彼らの会堂で教え、王国の福音を伝え、ありとあらゆる病氣と障害を直された)。同様の例はこれ以外にも挙げることができる⁴。このような分詞の多用は必然的に分詞の持つ意味の多様さをもたらし、文の内容を豊かにもし逆に曖昧にもしている。今挙げた例ではゴート語はギリシャ語原典をできるだけ忠実に翻訳しているが、すべてがそうというわけではない。たとえば例文4においては、ギリシャ語原典の現在分詞をゴート語では命令形に書き換え、文の意味を明確にしようとしている。ギリシャ語原典の『マタイによる福音書』ではほとんど全節といってもいいほど分詞が用いられその多用ぶりには驚かされる。ゴート語は確かにそれを一字一句逃さず的確に翻訳しようとしている。しかし、例文4のようにギリシャ語原典とは異なる訳も行われている。問題はこの相違がゴート語本来の文法から生じているのか、或いはただ単に訳者の恣意的な意図から生まれたものなのかという点である。この点、冠詞の使い方に関しては、上の本文中の引用においては、文法の違いを問うことができるであろう。しかし、今見てきたゴート語分詞の用例はギリシャ語原典をおおむね忠実に翻訳していると言えるであろう。

次に分詞に修飾語句が添えられた副詞的な用法の例を見てみよう。

5) qipands : frawaurhta mis *galewjands* bloþ swiķn. (Mat. 27, 4)

λέγων, Ἡμαρτον παραδοῦς αἷμα ἀθῶνον.

(ユダは) 言った「汚れのない血を渡して過ちを犯した」

6) iþ Iesus *gawandjands* sik jah *gasaihwands* þo qap : (Mat. 9, 22)

ὁ δὲ Ἰησοῦς στραφεῖς καὶ ἰδὼν αὐτὴν εἶπεν,⁵

そこでイエスは振り向いて、その女性を見て言われた。

7) Jah *atsteigands in skip* ufarlaih jah qam in seinai baurg.

(Mat. 9, 1)

Καὶ ἐμβὰς εἰς πλοῖον διεπέρασεν καὶ ἦλθεν εἰς τὴν ἰδίαν πόλιν.⁶

そして (イエスは) 舟に乗り (湖) を渡り, 彼の町に着いた。

8) jah *usstigun* in skip, iddjedunuh ufar marein in Kafarnaum.

(Joh. 6, 17)

καὶ ἐμβάντες εἰς πλοῖον ἤρχοντο πέραν τῆς θαλάσσης εἰς Καφαρναούμ.⁷

そして (弟子たちは) 舟に乗り, 湖を越えカパナウムへ行った。

例文5のゴート語の現在分詞 *galewjands* はギリシャ語原典ではアオリスト分詞であり, 接頭辞 *ga-*によって時称の違いを正確に表そうとしている。さらに, この分詞は対格の目的語を取り, 文 (Satz) の形式に一步近づいている。意味的には原因・理由を表していると言える。例文6のゴート語前半の再帰代名詞 (対格) を伴っている現在分詞は, ギリシャ語原典の受動・アオリスト分詞を訳したものである。ここでも接頭辞 *ga-*が添加され, 原典のアオリスト時称の分詞を正確に翻訳しようとしている。後半の目的語 *þo* を取っている現在分詞は, ギリシャ語原典では能動・アオリスト分詞であり, 前半の分詞と同様 *ga-*が添えられ, 原典の時称に近づこうと努めている。先の例文で示したように, ギリシャ語原典では主語が同一である動詞が続く場合, 重要な一語を定動詞にし, 残りの動詞を分詞にするのであり, ゴート語もおおよそこれに倣っている。従って, これらの分詞は *und* などの接続詞と定動詞で表すことが可能であろう。しかし, 例文7の現在分詞 *atsteigands* に対するギリシャ語はアオリスト・能動分詞であるにもかかわらず, 接頭辞 *at-*のために *ga-* が添加されない例である。この点にはゴート語の時称体系の単純さが現れている。また例文8のゴート語 *usstigun* に対する原典でのギリシャ語はアオリスト・能動分詞であり, ギリシャ語にそのまま倣っていない。これは今述べたギリシャ語原典と比較した場合のゴート語の時称体系の単純さを意識してのことであろう。

さてこんどは比較的長い修飾語句を従えた副詞的用法の分詞を見てみよう。この分詞句は, その修飾語句の長さの点でかなり文としての性格に接

近している。

- 9) *gasaihvands þan Iesus managans hiuhmans bi sik, haihait galeiþan siponjans hindar marein.* (Mat. 8, 18)

Ἰδὼν δὲ ὁ Ἰησοῦς ὄχλον περὶ αὐτὸν ἐκέλευσεν ἀπελθεῖν εἰς τὸ πέραν.⁸

イエスは自分の周りの群衆を見て、弟子たちに向こう岸へ行くよう命じられた。

- 10) *ip Iohannes gahausjands in karkarai waurstwa Xristaus, insandjands bi siponjam seinaim qaþ du imma* (Mat. 11, 2)

Ὁ δὲ Ἰωάννης ἀκούσας ἐν τῷ δεσμοτηρίῳ τὰ ἔργα τοῦ Χριστοῦ πέμψας διὰ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ εἶπεν αὐτῷ. (Mat. 11, 2-3)

ヨハネは牢獄でキリストの業を聞き彼の弟子たちを遣わして彼（キリスト）に言った。

例文9・10はゴート語では現在分詞であるが、ギリシャ語原典ではともに能動・アオリスト分詞であり、先の例文5・6に見られたように接頭辞 *ga-*が添えられている。例文9の現在分詞 *gasaihvands* は主語 *Iesus* よりも前にあるが、例文10の現在分詞 *gahausjands* と *insandjands* は主語 *Iohannes* よりも後ろにある。もし例文10の現在分詞が直前にある名詞 *Iohannes* を修飾していると見做すなら、*gahausjands* 以下は関係文的な働きをしていることになるだろう。従ってその場合はこれらの分詞は副詞的ではなく、形容詞的に使用されているといえる。形容詞的な分詞の用法については後述することにする。また例文9のゴート語では分詞節の終わりにコンマを打ち、文意を明確にしている。この2例の分詞句はかなり文としての形態に近づいていて、副文的な色彩が非常に濃くなってきている。次に独立的に使われた分詞を見てみよう。

- 11) *jah urrann sa dauþa gabundans handuns jah fotuns faskjam, jah wliþs is auralja bibundans.* (Joh. 11-44)

ἔξηλθεν ὁ τεθνηκὼς δεδεμένος τοὺς πόδας καὶ τὰς χεῖρας κειρίαις καὶ ἦ ὄψις αὐτοῦ σουδαρίῳ περιεδέδετο.⁹

そして死人が手足を包帯で巻かれ、そして顔は手拭いを巻かれて出てきた。

例文11の後半 *wlits* は主格であり、過去分詞 *bibundans* の主語である。この分詞節は前半の *sa dauþa* が、主語である定動詞 *urrann* 従属し、独立的に使われている。ギリシャ語原典ではこの独立分詞に当たる部分は受動・過去完了・単数・3人称で書かれている。ゴート語のこの分詞の用法はラテン語の独立主格 (*nominativus absolutus*) に相当する。新訳聖書を訳したゴート語ではこの用法は2例のみである。この構文が例文9・10を下敷きにしていることは十分考えられることであるが、用例が2例しか無いことから、独立主格はゴート語ではあまり馴染みのない用法であったと推測される。さて続けて分詞の独立的な用例を見ていこう。

- 12) *jah Ivarbondin Iesua jaimþro, laistidedun afar imma twai blindans, (Mat. 9, 27)*

Καὶ παράγοντι ἐκεῖθεν τῷ Ἰησοῦ ἠκολούθησαν [αὐτῷ] δύο τυφλοὶ¹⁰
イエスがそこから歩いて行くと、二人の盲人が彼のあとをついてきた。

- 13) *gaqumanaim þan im, qaþ im Peilatus: (Mat. 27, 17)*

συνηγμένων οὖν αὐτῶν εἶπεν αὐτοῖς ὁ Πιλάτος,
それから彼らが集まって来たとき、ピラトは彼らに言った。

- 14) *at andanahtja þan waurþanamma, atberun du imma daimonarjans managans, (Mat. 8, 16)*

᾽Οψίας δὲ γενομένης προσήνεγκαν αὐτῷ δαιμονιζομένους πολλούς·
夕方になると、人々は彼の所に多くの悪魔に憑かれた者たちを連れてきた。

- 15) *iþ þan seiþu warþ, qam manna gabigs af Areimapaiais*

(Mat. 27, 57)

᾽Οψίας δὲ γενομένης ἦλθεν ἄνθρωπος πλούσιος ἀπὸ Ἀριμαθαίας,
夕方が来たとき、アリマタ生まれの人が来た。

- 16) *parei matidedun hlaif, ana þammei awiliudoda frauja.*

(Joh. 6, 23)

τοῦ τόπου ὅπου ἔφαγον τὸν ἄρτον [εὐχαριστήσαντος τοῦ κυρίου.]

主が感謝したパンを人々が食べた所へ (来た).

17) ἰὴ Χριστὸς, βίβη γιμίβ, ni manna wait hvaþro ist. (Joh. 7, 27)

ὁ δὲ Χριστὸς ὅταν ἔρχηται οὐδεὶς γινώσκει πόθεν ἐστίν.¹¹

しかしキリストが来る時には、誰も彼がどこから来るのか知らない。

例文12ではギリシャ語・ゴート語の両方で独立与格が使われている。同じ例は Mat. 8, 23. 9, 28 にもある。例文13ではギリシャ語の独立属格に対してゴート語は独立与格で訳している。同じ例は Mat. 27, 19. Joh. 6, 18. 8, 30 にもある。例文14ではギリシャ語の独立属格をゴート語は前置詞 at 付きの独立与格で翻訳している。同じ例は Mat. 8, 16. 11, 7. 27, 1 にも見られる。例文15ではギリシャ語の独立属格をゴート語では接続詞 þan を用いた副文に書き換えている。同様な例は Mat. 9, 10. 18. 32. 33 にもある。例文16ではギリシャ語の独立属格をゴート語は関係代名詞 þammei (男・単・与) を用いて書き換えている。これは珍しい例とみられ、他の用例は見つけられなかった。例文17ではギリシャ語の接続詞 ὅταν を用いた副文を、ゴート語でも接続詞 biþe を使って副文として訳している。同様の例は Joh. 6, 16. 7, 31 にも見られる。さて例文12から16までを類例も含めて整理すると次のようになる¹²。

表 1

ゴート ギリ シャ	独 属	独 与	at 独与	at 独対	接 詞	関 代	
独属	—	4	3	1	5	1	• 独属 (独立属格)
独与	—	3	—	—	—	—	• 独与 (独立与格)
接詞	—	—	—	—	3	—	• at独与 (at 付き独立与格)
							• at独対 (at 付き独立対格)
							• 接詞 (接続詞)
							• 関代 (関係代名詞)

表1から次のことが分かる。ギリシャ語の独立属格14例のうちゴート語が純粋な独立分詞で書換えているのは僅か4例であり、しかも独立属格ではなく独立与格構文に書き換えている。それに対し、ギリシャ語の独立与格はゴート語もそのまま独立与格で訳している。つまりゴート語には、新訳聖書のギリシャ語の独立属格分詞構文をそのまま翻訳することに対する違和感のようなものがあつたと推測される。ゴート語はギリシャ語の独立属格を前置詞 *at* を用いて書換え、さらに接続詞を使って訳しているところから見ると、訳者はゴート語では属格の意味的機能が弱まったため、与格にその副詞的機能を持たせ、さらに与格でも明確に副詞的な意味を表現できない時には、前置詞 *at* や接続詞を用いてギリシャ語原典の内容の正確な翻訳に努めたと想像することができる。このようにゴート語はギリシャ語の独立属格をそのまま訳すのではなく、他の文法形式に書き換えている。このことはゴート語には独立属格という文形式があまり馴染みのない構文であることを示している。そして、ゴート語はむしろ前置詞句や副文といった分析的な統語形式を好む傾向が起ることが分かる。次の例文18は独立対格へと移る過渡的構文とされているが（千種真一、76ページ参照）、ここでもやはりギリシャ語原典は独立属格で書かれている。

18) *fairra wisandan gasahv ina atta is* (Luk. 15, 20)

彼の父は遠くに在る彼を見た。

αὐτοῦ μακρὰν ἀπέχοντος εἶδεν αὐτὸν ὁ πατὴρ αὐτοῦ

彼が遠くにいた時に、彼の父は彼を見た。

19) *usgaggandan þan inā in daur*, *gasahv ina anþara* (Mat. 26,71)

ἔξεληθόντα δὲ αὐτὸν εἰς τὸν πυλῶνα, εἶδεν αὐτὸν ἄλλη (シュトライトベルク)

そして彼が玄関に出でいくと、彼をもう一人の女中が見た。

ἔξεληθόντα δὲ εἰς τὸν πυλῶνα εἶδεν αὐτὸν ἄλλη (連合聖書協会版) (千種真一、13・14ページ参照)

玄関に出でいく彼をもう一人の女中が見た。

例文18の *fairra wisandan* (*fern seienden*) は *ina* (*ihn*) と同格的に

使われた形容詞的用法の現在分詞（男・単・対）と考えられる。この場合のゴート語の形容詞的現在分詞は名詞化されていて、「遠くにいる者」ほどの意味だろう。この箇所ギリシャ語原典は、副詞的な独立属格であり、ゴート語の翻訳とは違っている。また、例文19のギリシャ語原典（連合聖書協会版）における名詞的な中動のアオリスト分詞句（男・単・対）を、ゴート語は逆に人称代名詞（男・単・対）inaを付け加え、独立対格構文で翻訳している例も見られる。しかしいずれにしても、このようにゴート語は属格の使用を回避しようとしていることは明らかであり、従ってゴート語における属格は、独立構文で使われている与格や対格に比べ、その使用範囲はかなり狭かったと推定される。ギリシャ語の属格に対してゴート語の属格の用法は限定されており、それを補うために副詞的用法のギリシャ語独立属格の代わりに、ゴート語は他の構文を用いようとしている。それらの構文は前置詞や接続詞を使ったものが多かったのは先に見たとおりである。ゴート語では、本来、印欧語が持っていた格（Kasus）の統語的並びに意味的機能がかなりの程度まで失われた結果、その機能をより正確に表すために他の文形式が用いられるようになったのである。この点に焦点をあて、次に形容詞的用法の分詞の用法に関して調べてみたい。

3. 形容詞的用法及びその名詞化

まず比較的短い語句を伴った形容詞的用法の分詞を見てみよう。

20) *hva usiddjedup ana aupida saihvan? raus fram winda wagidata?*

(Mat. 11, 7)

*Τί ἐξήλθατε εἰς τὴν ἔρημον θεάσασθαι; κάλαμον ὑπὸ ἀνέμου σαλευόμενον;*¹³

汝らは何を見るために荒野へ出掛けたのか。風に揺り動かされている葦をか。

21) *iþ þai gudjans nimandans þans skattans qepun:* (Mat. 27, 6)

*οἱ δὲ ἀρχιερεῖς λαβόντες τὰ ἀργύρια εἶπαν,*¹⁴

すると大司祭たちは銀貨を取りながら言った。

例文 20 ではゴート語はギリシャ語を逐語訳している。またこの分詞句 (wagidata は wagjan の過去分詞で、中・単・対である) は、現代ドイツ語でならば関係代名詞を用いて書かれるところであろう。例文21でもゴート語はギリシャ語原典に従っている。この分詞句は上の日本語訳では副詞的に訳したが、形容詞的にも或いは名詞的にも訳せるであろう。形容詞的には「銀貨を取ろうとしている大司祭たち」、名詞的には「銀貨を取ろうとしている者である大司祭たち」ほどの意味になるであろう。しかし、例文21では、その分詞句が形容詞的に使われているのか、或いは名詞的に使われているのかははっきりしない。これに対し例文22・23の分詞は明らかに名詞的に使われている¹⁵。

22) þu is sa qimanda ...? (Mat. 11, 3)

Σὺ εἶ ὁ ἐρχόμενος ...;

あなたは来るべき方ですか。

23) þai waidedjans þai miþushramidans imma idweitidedun imma.
(Mat. 27, 44)

οἱ λησταὶ οἱ συσταυρωθέντες σὺν αὐτῷ ὠνειδίζον αὐτόν.¹⁶

彼と一緒に十字架につけられた者たちである強盗は彼を罵った。

ギリシャ語原典では例文22は、中動相・現在の分詞で男・単・主格の形容詞語尾が付けられ、例文23は受動・アオリスト分詞で男・複・主格の形容詞語尾が添加されている。ゴート語は前者を現在分詞で、後者を過去分詞で訳し、ギリシャ語に倣いそれぞれ前に指示代名詞 sa/þai を置いている。なお例文23では、ゴート語はギリシャ語にある前置詞 σὺν を訳していない。分詞が形容詞的に使用されているのか、或いは名詞的に使用されているかについてももう少し見てみよう。次の例文24・25の分詞は副詞的な用法と考えられる。

24) jah duatgaggandans siponjos is urraisidedun ina qibandans :

(Mat. 8, 25)

καὶ προσελθόντες ἤγειραν αὐτόν λέγοντες,¹⁷

- そして彼の弟子たちは近寄って来て、彼を起こして言った。
 25) ik qimands gahailja ina. (Mat. 8, 7)
 Ἐγὼ ἐλθὼν θεραπεύσω αὐτόν.
 私が行って彼を治すだろう。

例文24・25のゴート語の現在分詞はギリシャ語原典では中動の現在分詞である。まず例文24では、ゴート語では原典に対応する表現のない siponjos is (彼の弟子たち)が、分詞の後に挿入されているため、分詞 duatgaggandans は副詞的に使われていると考えた方が妥当であろう。しかし、ギリシャ語原典では duatgaggandans に対応する *προσελθόντες* の主語はかなり前方にある別の文中に現れており、このギリシャ語の分詞は副詞的ではなく、むしろ定動詞 *ἤγειραν* の主語として名詞的に用いられていると見做したほうが良いだろう。もしこれが正しいのなら、ゴート語は原典の名詞的分詞を副詞的分詞に訳し直していることになる。しかし、例文25では分詞はギリシャ語に倣い、主語のすぐ後ろに置かれ、副詞的な意味での解釈が最も適しているであろう。だがまた例文25の分詞 qimands は例文22に出てきた sa qimanda と類似していて、語形は異なるもののどちらも形容詞の弱変化・単・主の語尾を添加され、名詞的なものと考えられなくもない。違いは指示代名詞の有無であるが、ゴート語の名詞は無冠詞であることが多く、冠詞(指示代名詞)がないからといって直ちに名詞的ではないと見做すのは軽率かもしれない。次の例を参考にして、これについて調べてみよう。

- 26) iþ eis usgaggandans galiþun in hairda sweine; (Mat. 8, 32)
 οἱ δὲ ἐξελθόντες ἀπῆλθον εἰς τοὺς χοίρους¹⁸
 そして彼ら(悪霊)は出て行き豚(の群れ)に入った。
 27) iþ þai haldandans gaþlahun (Mat. 8, 33)
 οἱ δὲ βόσκοντες ἔφυγον,
 そして家畜の番をしている者たちは逃げた。

例文26では、ゴート語はギリシャ語原典の οἱ を人称代名詞 eis (彼ら)

で訳しているのに対し、例文27では同じ *oi* を今度は指示代名詞 *pai* (男・複・主) で翻訳している。分詞との結び付きは *eis* よりも *pai* の方が強いことは明白である。つまり、*pai* は現在分詞と結んで名詞句を作っているが、*eis* は定動詞 *galipun* の主語ではあるが、現在分詞にとっては意味上の主語でしかないのである。明らかにゴート語の訳者は、ギリシャ語に全面的に従って翻訳を行っているのではなく、自分の語感、或いは明らかではないのだが、ゴート語の文法に従って訳を進めて行ったと考えられる。次の例文の28の *oi* は、定冠詞として使われていて、人称代名詞とは考えられないことから、ギリシャ語においては冠詞は名詞或いは名詞的なものの直前に置かれた場合、単独で人称代名詞として使われるよりも、むしろ名詞(的なもの)と結んで、名詞句を成す傾向が強かったと推定される。これが正しいなら、例文26でゴート語が原典の *oi* を強いて *eis* で訳していることは、ゴート語の分詞は副詞的な機能が優勢であったことを示す一つの例証になるであろう。

28) *ip pai mans sildaleikidedun qipandans: (Mat. 8, 27)*

oi de anthrōpoi ethaumasan legontes,

そしてそれらの人々は驚いて言った。

従って、例文25の *qimands* はギリシャ語原典において指示代名詞が添えられていないゆえに一層副詞的な分詞と考えられる。つまり、ここで問題になっているのは、ゴート語においては分詞の名詞化がどの程度まで許容されたのかということである。例えば今見た例文24・26では、ギリシャ語原典における分詞は名詞的にも解釈されうるにもかかわらず、ゴート語では、名詞的ではなく副詞的な分詞と考えた方が妥当と思われる構文に訳し変えられているのである。このことから、ゴート語はギリシャ語の名詞的な分詞(句)をそのまま受け入れることはできなかったと推定される。この点を調べるために、ゴート語の現在分詞による名詞句をさらにもう少し検討してみよう。

29) *panuh gasaihvands ludas sa galewjands ina patei...*

(Mat. 27, 3)

Τότε ἰδὼν Ἰούδας ὁ παραδιδούς αὐτὸν ὅτι...

それから彼を引き渡したユダ...を見て、

- 30) *sa wisands us guda* (Joh. 8, 47)

ὁ ὢν ἐκ τοῦ θεοῦ

神から出た者は

- 31) *gaggiḅ fairra mis, jus fraqiḅanans, in fon ḅata aiweino, ḅata manwido unḅulḅin jah aggilum is.* (Mat. 25, 41)

*Πορεύεσθε ἀπ' ἐμοῦ [οἱ] κατηγορούμενοι εἰς τὸ πῦρ τὸ αἰώνιον τὸ ἕτοιμασμένον τῷ διαβόλῳ καὶ τοῖς ἀγγέλοις αὐτοῦ.*¹⁹

呪われた汝らよ、私から離れ、火、つまり永遠なるもの、悪魔とその使いたちに準備されたものに入れ。

- 32) *jah ḅande pata hawi haiḅjos himma daga wisando jah gistradagis in auhn galagiḅ guḅ swa wasjiḅ,* (Mat. 6, 30)

εἰ δὲ τὸν χόρτον τοῦ ἀγροῦ σήμερον ὄντα καὶ αὔριον εἰς κλίβανον βαλλόμενον ὁ θεὸς οὕτως ἀμφιένυσιν,

というも、今日はあるが明日は炉の中に投げ込まれる野原の草さえも、神はこのように着飾らせておられるのだから、

例文29・30の分詞句は名詞的に使われている。また例文31の過去分詞 *manwido* によるかなり長い分詞句も名詞的である。この3例はギリシャ語原典を逐語的に翻訳しているのだが、これらの共通点は指示代名詞が分詞句の先頭に置かれているということである。それに対し、例文32では、分詞句の先頭には指示代名詞はなく、直前の名詞句を修飾する形容詞的な分詞句であり、ゴート語の名詞的分詞句の限界を暗示しているのかもしれない。だが、この例文もギリシャ語原典に従ったものである。いずれにせよ例文29・30・31は、ゴート語が分詞を名詞的にかなり自由に使えたことを支持している例証になるかもしれない。しかし、次の例文のようにゴート語が、ギリシャ語原典の分詞句を副文に書き換えている例も見られ、ゴート語の分詞の副詞的傾向を改めて支持することになる。

33) *atta saei sandida mik* (Joh. 6, 44)

ὁ πατήρ ὁ πέμψας με

私を遣わした父

34) *saei frijōþ attan aiþrau aiþein ufar mik*, (Mat. 10, 37)

Ὁ φίλων πατέρα ἢ μητέρα ὑπὲρ ἐμὲ

私よりも父や母を愛するもの (は私に値しない)

例文33・34では、ギリシャ語原典の分詞句に対して、ゴート語は関係代名詞を用いた副文で書き換えている。このようにギリシャ語の分詞句をゴート語が関係文で書き換えている例はかなり見られる²⁰。これらの関係文が、どのような場合に、ギリシャ語原典におけるように、また上の日本語訳のごとく名詞的に使われているのか、或いはそれと違って形容詞的に使用されているのかは明らかでない。ここではもっと正確に調査してみないと統計的数値を挙げることはできないのだが、それでもやはり、ゴート語はギリシャ語原典では名詞的な分詞を関係文として副文に書き換えているのであるから、ゴート語における副文へのある程度の傾向は、示唆することができるのではないだろうか。さらに、次の例文35・36のように、ギリシャ語においては同一の名詞的な分詞句を、ゴート語は、指示詞を添えた名詞的分詞句としてだけでなく、関係文による副文としても訳していることから、名詞的分詞句だけでなく、ギリシャ語原典よりも一歩進んだ副文的な文形式をゴート語は使用していたと思われる。

35) *hlaiþs sa libanda, sa us himina qumana*; (Joh. 6, 51)

ὁ ἄρτος ὁ ἔκ τοῦ οὐρανοῦ καταβάς

命であり、天から降りてきたものであるパン

36) *hlaiþs saei us himina atstaig*, (Joh. 6, 58)

ὁ ἄρτος ὁ ἐξ οὐρανοῦ καταβάς,

天から降りてきたパン

3. ま と め

これまで見てきた幾つかの例文は、ギリシャ語原典での名詞的な構文がゴート語においては形容詞的、或いは副詞的な副文に書き換えられていること、そしてまた原典での形容詞的、及び副詞的分詞（句）がゴート語では前置詞句や接続詞を用いた副文に翻訳され、ゴート語がギリシャ語原典の逐語訳ではないことを示すとともに、さらに進んで、ゴート語においては副文的統語形式がかなり発達していたことをも、明確ではないまでも示唆しているといえる。このことは推測でしかない。しかし、ゴート語が、ギリシャ語原典を強いて書き換えてまでも、副文的構文（分詞の副詞的用法から関係文、更に接続詞を用いた副文へと至る一連の構文）をかなり使っているということは、見逃せない事実なのである。先に挙げた例文18 *fairra wisandan gasah inatta is* (Luk. 15, 20) では、ゴート語では名詞的な分詞句をギリシャ語ほど自由に使えなかったことを例示している。*inatta* (ihn) と同格的に使われているはずの名詞的な分詞句 *fairra wisandan* は、その前に指示詞 *þana* (男・単・対) がない結果、副詞的な特徴が強まり、*inatta* を取り込んだ独立対格のような構文に見え、後の副詞的な分詞構文を準備することになり、さらには、分詞句から副文へと至る糸口をも見出だすことになったと想像することも可能であろう。

最後に、ラテン語のギリシャ語自身及びゴート語への影響を考慮に入れること、述語的用法の分詞の検討、そして、ゴート語の調査範囲を広げることが今後の課題になるであろう²¹。

注

- 1 ゴート語の引用は次のテキストに拠った。Streitberg, Wilhelm (hrsg.): *Die gotische Bibel, 1. Teil: Der gotische Text und seine griechische Vorlage mit Einleitung, Lesarten und Quellennachweisen sowie den kleineren Denkmälern als Anhang*. Heidelberg 1908, 2. Teil: *Gotisch-griechisch-deutsches Wörterbuch*. Heidelberg 1910. またギリシャ語の引用は主として、K. Aland, M. Black, C. M. Martini, B. M. Metzger and A. Wikgren (edit.): *The New Testament, Greek and English*. New York 1975, (連合聖書協会版) に依り、シュトライトベルク編集のギリシャ語テク

ストと異なる場合はその都度注の中で示すことにした。

2 千種真一『ゴート語の聖書』, 大学書林, 1989年参照。

3 注3と, 5から11, そして13, 14, 及び16から19までは, シュトライトベルクに依るギリシヤ語テキストでの該当箇所を挙げる。

πορευθέντες δὲ μάθετε τί ἐστὶν ἔλεον θέλω καὶ οὐ θυσίαν.

4 例えば Mat. 9, 9. 11, 18. 27, 48. Joh. 6, 19 等である。

5 *ὁ δὲ Ἰησοῦς ἐπιστραφεὶς καὶ ἰδὼν αὐτὴν εἶπεν*

6 *καὶ ἐμβὰς εἰς τὸ πλοῖον διεπέρασεν καὶ ἦλθεν εἰς τὴν ἰδίαν πόλιν.*

7 *καὶ ἀναβάντες εἰς τὸ πλοῖον ἤρχοντο πέραν τῆς θαλάσσης εἰς Καπερναούμ.*

8 *ἰδὼν δὲ ὁ Ἰησοῦς πολλοὺς ὄχλους περὶ αὐτὸν ἐκέλευσεν ἀπελθεῖν εἰς τὸ πέραν.*

9 *καὶ ἐξῆλθεν ὁ τεθνηκὼς δεδεμένος τὰς χεῖρας καὶ τοὺς πόδας κειρίαις, καὶ ἡ ὄψις αὐτοῦ σουδαρίῳ περιεδέδετο*

10 *καὶ παράγοντι ἐκέθειν τῷ Ἰησοῦ, ἠκολούθησαν αὐτῷ δύο τυφλοὶ*

11 *ὁ δὲ Χριστὸς ὅταν ἔρχηται, οὐδεὶς γινώσκει πῶθεν ἐστίν*

12 ギリシヤ語独立属格をゴート語が at 付きの対格分詞構文で訳している例は (Mat. 27, 1) である。

13 *τί ἐξήλθετε εἰς τὴν ἔρημον θεάσασθαι; κάλαμον ὑπὸ ἀνέμου σαλευόμενον;*

14 *οἱ δὲ ἀρχιερεῖς λαβόντες τὰ ἀργύρια εἶπον*

15 分詞による名詞句には次のようなものもある。

jah gamunda Paitrus waurdis Iesuis qībanis du sis (Mat. 26, 75)

καὶ ἐμνήσθη ὁ Πέτρος τοῦ ῥήματος Ἰησοῦ εἰρηκότος

そしてペテロはイエスが自分に言った言葉を思い出した。

ゴート語の過去分詞・男・単・属 qībanis は, ギリシヤ語原典の能動完了分詞・男・単・属をそのまま訳している。ゴート語の過去分詞 qībanis は能動の意味を持っている。

なおシュトライトベルクのギリシヤ語テキストでは文末と αὐτῷ が付け加えられている。

16 *οἱ λησται οἱ συσταυρωθέντες αὐτῷ ὠνείδισον αὐτὸν. (σὺν ἡμῖν)*

17 *καὶ προσελθόντες οἱ μαθηταὶ ἤγειραν αὐτὸν λέγοντες*

18 *οἱ δὲ ἐξεληθέντες ἀπῆλθον εἰς τὴν ἀγέλην τῶν χοίρων*

19 *πορεύεσθε ἀπ' ἐμοῦ, οἱ καταραμένοι, εἰς τὸ πῦρ τὸ αἰώνιον τὸ ἡτοιμασμένον τῷ διαβόλῳ καὶ τοῖς ἀγγέλοις αὐτοῦ.*

- 20 例えば Mat. 6, 18. 11, 14. 27, 17. Joh. 6, 5. 22. 23. 33. 7, 18 等である.
- 21 当論文ではシュトライトベルクに依るゴート語テキストの『マタイによる福音書』全篇及び『ヨハネによる福音書』の8章までを調査範囲とした.

Der Gebrauch des Partizips in *der gotischen Bibel*

—im Vergleich mit dem griechischen Original—

Akira SHIDA

In vorliegender Abhandlung behandle ich zwei verschiedene Gebrauchsarten des Partizips in *der gotischen Bibel*. Die erste ist adverbial, die zweite adjektivisch.

Zwar sagt man, daß ein Gote Wulfila das Griechische in dem Neuen Testament Wort für Wort ins Gotische übersetzte. Aber das ist bei dem Partizip nicht immer der Fall. Warum ahmte er dabei das griechische Original nicht nach? Folgte er seinem eigenen Sprachgefühl oder einer gotischen Syntax? Das ist ein ungelöstes Problem. Jedoch möchte ich in dieser Untersuchung eine Tendenz erörtern, d. h. die zum analytischen Satzbau oder zur Struktur, die dem Nebensatz ähnlich ist. Diese Tendenz können wir in dem griechischen Original nicht finden. So könnte man sagen, daß dieser Satzbau dem Gotischen wesentlich ist.

Das adverbiale Partizip ist gebraucht bald selbständig, bald mit den Bestimmungen und bald absolut. Der selbständige Gebrauch ist *ip Iesus gahausjands qap du im. (als das Jesus hörte, sprach er)* (Mat. 9, 12). Der Gebrauch mit den Bestimmungen ist *jah atsteigands in skip* (und da stieg er in ein Boot) (Mat. 9, 1).

In dem griechischen Original (das ganze Evangelium nach Matthäus und das Evangelium nach Johannes [bis zum 8. Abschnitt]) finde ich 14 genetivus absolutus. Wulfila übersetzte 4 durch dativum absolutum, 3 durch *at* mit dativo absoluto, 1 durch accusativum absolutum, 5 durch Konjunktionen, 1 durch ein

Relativpronomen. Den Satzbau durch *at* mit dativo absoluto können wir für einen analytischen, und den Satzbau durch Konjunktionen für einen Nebensatz halten. Für den griechischen genetivum findet Wulfila andere Übersetzungen, zum Beispiel eine durch *at*; *at andanah̄tja þan waurþanamma* (wenn es Abend wurde (Mat. 8, 16), und eine durch Konjunktion *ip*; *ip þan seiþu warþ* (wenn es Abend wurde) (Mat. 27, 57).

Der adjektivische Gebrauch des Partizips ist wie folgt: *raus fram winda wagidata* (Mat. 11, 7) (ein Schilfrohr *im Wind hin und her geschwankt*). Das adjektivisch gebrauchte Partizip wird auch substantivisch verwendet: *þu is sa qimanda* (du bist *der Kommende*) (Mat. 11, 3). Diese zwei Beispiele übersetzte Wulfila nach dem Vorbild des griechischen Originals. Aber der folgende Satz ist von der griechischen Vorlage syntaktisch verschieden: *atta saei sandida mik* (der Vater, *der mich sandte*) (Joh. 6, 44). Die griechische Vorlage ist durch einen Partizipialsatz geschrieben. Viele griechische partizipiale Nominalphrasen sind durch gotische Relativsätze umschrieben.

Daher könnten wir die Tendenz zum analytischen Satzbau im Gotischen annehmen. Aber wir müssen auch den Einfluß klassischen Lateins aufs Gotische in Betracht ziehen.